

学校教育ビジョン  
 【教育目標】  
 【目指す児童像】  
 【基本方針】  
 【研究主題】

「自ら考え、行動できる子の育成」(スローガン) 輝く こほく! ~自分から 自分たちから~  
 「こ 心の汗をかき ほ 本気で学び く くじけずやり抜く子」  
 ①主任を中心とした組織の中で、各々が公務に責任をもち、目標の具現化を図る。②いじめ・不登校に対し、全教職員の共通理解のもと、組織として対応する。③積極的に研究と修養に励み、若プロをいかした指導力の向上を図る。④学校の危機に対して、研修や訓練を行い、迅速で適切な対応をとる。⑤教科横断的な視点をもったカリキュラムマネジメントの充実を図る。  
 「主体的な関わりの中で学びを深める児童の育成 ~考えたい!話したい!聞きたい!~

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の対応
①教育課程・学習指導	主体的な学びにつながる授業改善と課題克服に向けた共通実践に組織的に取り組み、確かな学力の向上を図る。	湖北スタンダードを基盤にし、規律と主体性のある授業づくりをする。学校研究と連携し授業改善と授業でつけた力を定着させる朝学習・帯タイムの学習を工夫し、全職員が組織的に取り組む体制を作る。	教務主任(奥村) 研究主任(桂田)	主体的に学ぶ児童の育成を目指し、読解力や自分の考えを書く力をつける授業改善、共通実践を行っている。取組の徹底、検証・改善をしっかりと行うことで、基礎・基本は定着してきたが、活用力に課題がある。	【成果指標】児童が、国語・算数において、学年として必要な学力をつけている。	国語・算数の単元末テストの全学年平均が、それぞれ A: 85%以上である。 B: 80%以上である。 C: 70%以上である。 D: 70%未満である。 国語・算数の活用力テストの全学年平均が、 A: 75%以上である。 B: 70%以上である。 C: 65%以上である。 D: 65%未満である。	国語・算数の単元末テスト 国語・算数の活用力テスト			
②生徒指導 ※いじめの未然防止	「正しいことを実践できる自主的・自律的な個」、「正しさを共有できる集団」、「寛容な認め合いのあるあたたかな集団」を育てる。	湖北スタンダード(いじめに関する3項目)や成長目標をもとに、定期的に自分たちの問題を自分たちで解決しようと取り組み、振り返る場を設ける。	生徒指導(竹村)	自分達の行動を正直にふり返ることができている児童が増えてきた。また、他者や集団に対して肯定的な評価が増え、集団で問題を解決しようとする意識が高まっている。しかし、個人差が大きい。	【満足度指標】児童が、自分たちのクラスによさ(問題を解決する力)を認めている。	湖北スタンダード(いじめに関する3項目)や成長目標に取り組み、自分たちのクラスの問題を自分たちで解決しようとしているクラスだと答えた児童が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月・12月に児童アンケートを実施			
③キャリア教育・進路指導	自分の成長やよさを認め、夢に向かって努力し、意欲的に学習できる児童を育てる。	日々の生活の中で目標をもち実践し、自分の成長を振り返る場を意図的に設定する。また、児童のよさを認める声掛けを継続的に行っていく。	キャリア教育担当(矢田)	自分のよさを認めている児童の割合は、昨年度、全校で約85.5%から86.7%まで上がった。しかし、自信をもって自分のよいところを認められる児童は多くない。	【満足度指標】児童が、自分のよさや成長を認め、高めようとしている。	自分にはよいところ、成長したところがあると答えた児童の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月、12月に児童アンケートを実施			
④保健管理	健康な生活を営むために必要な基本的な生活習慣の確立を目指し、実践できる児童を育てる。	せいかつチェックを活用し、学級での全体指導や個別指導、家庭との連携をしながら生活習慣を改善していく。	保健主事(中谷) 養護助教諭(宮西)	コロナ対策は緩和されてきたが、毎日の検温や手洗い・消毒の徹底は続けられている。そのため、毎日清潔なハンカチを準備しようとする意識を高め、基本的な生活習慣を身に付けられるようにしたい。	【成果指標】清潔なハンカチを毎日持ってくる児童の割合が高まっている。	せいかつチェックにおいて、ハンカチを持ってきている児童の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	毎週火曜日に児童にみだしなみ・せいかつチェックを実施			
⑤安全管理	児童が安全・安心な学校生活を送れるよう、職員、児童の危機対応力及び危機回避能力の向上を図る。	火災や地震等を想定した避難訓練やシェイクアウト訓練、防犯教室を計画的に実施する。また、事前・事後の指導の徹底を図っていく。	教頭	昨年度は引き渡し訓練も実施でき、種々の訓練において、児童は適切に避難行動を取ることができた。また、教職員の係分担当が機能し、危機管理の対応力を高まりが見られた。しかし、若手教員が多いことから、常に教職員の危機管理意識を高く保つ対策が必要である。	【努力指標】訓練時において、児童・教職員が、危機管理マニュアルを理解し、それに沿った行動をとっている。	①避難訓練やシェイクアウト訓練時に、適切に行動できたと感じる児童の割合が、 ②事故や怪我がないように安全に配慮していると答えた教職員の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	避難訓練やシェイクアウト訓練後、及び、7月、12月に児童・教職員にアンケートを実施			
⑥特別支援教育	支援を必要とする児童への支援・協力体制を引き続き整えるとともに、授業における個に応じた指導の工夫や充実を図る。	支援が必要な児童の現状を正確に把握するために、校内全体会を定期的に設定する。また、支援員の助言等を参考に個に応じたよりよい指導方法について理解し実践する。支援が必要な児童への授業中の具体的な手立てを学ぶ場や、情報交換する場を設定し実践する。	特別支援コーディネーター(根石) (山下)	支援が必要な児童の現状把握及び支援体制の整備等により、個に応じたきめ細かな指導を行うことができるようになってきている。今年度は、教育支援員との授業中の連携や情報共有の在り方について検討し、個に応じた指導の充実をより一層図っていきたい。	【努力指標】教職員が、支援が必要な児童の現状を正確に把握し、個に応じたよりよい指導方法について具体的な方針を立て実施している。	①支援が必要な児童への個に応じた指導が学校全体で組織的・計画的に行われていると答えた教職員の割合が、 ②先生は、授業やテストで間違えたところや、分からないところについて、分かるまで教えてくれると答えた児童の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月・12月に児童・教職員にアンケートを実施			
⑦組織運営・業務改善	業務の精選、勤務時間に対する職員の意識改革を進める。	勤務時間記録表をもとに時間外勤務時間が45時間を超えない働き方の意識を高めるとともに、業務の精選・削減・平準化を実践する。	教頭	業務の見直しや効率化、退勤時刻の声掛け等により、業務改善は進んできている。定時退校日の確実な実施や勤務時間記録の意識等により、各自が自分の働き方を見直していく必要がある。	【成果指標】教職員が、適切な組織の中で、計画的に自分の業務に取り組む、勤務時間の削減が図られている。	時間外労働時間を45時間以下にしようと努力していると答えた教職員の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月・12月に教職員にアンケートを実施			
⑧研修	算数の授業作りの研究、本校独自の共通システムについての共通実践に取り組む。	3つの重点をもとに、外部講師招へいしながら、授業研究の充実を図っていく。	研究主任(桂田) 若手プロ担当(奥村)	算数の研究1年目として校内研修を行い、共通実践から見えてくる課題を更に改善し深めていく。また、若手育成のため組織的対応を進める。	【満足度指標】教職員が、校内研修会や若手研修会の内容を授業づくりや指導全般に役立てている。	校内研修会や若手研修の内容が、授業づくりや日々の指導に役立っていると答えた教職員の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月・12月に教職員にアンケートを実施			
⑨保護者、地域との連携	保護者とともに課題解決に取り組み、ともに児童の成長を喜ぶことができる連携をつくる。	家庭でのメディアの長時間利用という課題について、保護者と共通理解する場を設定し、PTA活動と効果的に連携させた取組を実施する。	PTA担当(教頭) げんまんカード担当(桂田)	教育活動全般において、家庭と学校との連携は取れてきている。しかし、家庭でのメディアの利用時間等のきまりが守られていない児童が4割以上あり、家庭間の差が大きい。改善には、情報モラルを含めたメディア利用の面での継続した家庭への働きかけ、児童のメディア使用の意識の向上が必要である。	【努力指標】保護者と教職員が、児童の課題とその解決に向けた取組を共通理解し、連携しながら解決に努めている。	メディア利用に関する実情及び取組を理解し、学校、家庭が連携して取り組むことができたと答えた保護者や教職員の割合が、 A: 85%以上である B: 75%以上である C: 65%以上である D: 65%未満である	7月・12月に保護者、教職員の方にアンケートを実施			
⑩教育環境整備	コミュニティ・スクール(CS)との連携しながら、保護者や地域とのつながりによって、学習を中心とした教育環境整備に努める。	CSの働きかけにより、保護者や地域の方々や学校をつなぎ、児童の学習支援や教職員の授業補助、学校環境整備等を行う。	教頭 教務主任	CSは、今年度初めて発足したため、まだ活動内容が定まっていない。CSコーディネーター(CSC)を中心として、年間を通して種々の教育支援活動を行いながら、CSの活動内容を確立し、機能させていきたい。	【努力指標】CSが学校のニーズに応える取組を実施しようとしている。	CSが種々の教育支援活動を行っていることと答えた教職員の割合が、 A: 90%以上である B: 80%以上である C: 70%以上である D: 70%未満である	7月・12月に教職員にアンケートを実施			

学校関係者評価	
---------	--